

企画展 ^{いんえい} 陰翳のなかの金彩 【近現代工芸】



中村卓夫《<箱をやめたハコ>宝珠図》国立工芸館蔵
Photography by S&T PHOTO
—「陰翳のなかの金彩」より—

- 絵画と調度 一重要文化財 伝雪舟筆《四季花鳥図》を中心に—
【前田育徳会尊経閣文庫分館】
- 加賀文化の粹 I 【古美術】
- 特別陳列 利家を描く 一再考と顕彰— 【前田育徳会尊経閣文庫分館】
- 加賀文化の粹 II 【古美術】
- 四季の移ろい I 【近現代工芸】
- 優品選 【近現代絵画・彫刻】
 - バスツアー参加者募集
 - 4月の行事予定
 - アラカルト ただいま展示中

企画展(第7・8・9展示室) 陰翳のなかの金彩

主催/石川県立美術館 特別協力/金沢金箔伝統技術保存会、石川県商工業協同組合、北國新聞社
後援/NHK金沢放送局、MRO北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、HAB北陸朝日放送

4月23日(日)～5月28日(日) 会期中無休

金は装飾のためにさまざまな形に加工され、工芸において金彩として用いられてきました。金沢で盛んに製造されている金箔も、金彩の素材のひとつです。本展覧会は、近代に入って大きく発展を遂げた金沢の金箔製造についてご紹介するとともに、工芸を唯一無二の作品に仕上げてくれる金彩の魔力を感じていただくものです。燦々とした光を受けて輝くばかりでなく、闇のなか、あるかなきかの明かりを映す金のゆらめき、陰翳のなかの金彩の魅力をご堪能ください。

第一部「金箔と金沢」では、金沢での金箔製造がどのように始まり、発展していったかをたどりながら、現在では金沢でしか行われていない製箔、なかでも縁付金箔と、それを用いた工芸を紹介します。縁付金箔は、伝統的な工法と熟練の手わざによって製造され、2020年にはユネスコ無形文化遺産に登録(伝統金箔・縁付)されています。

第二部「工芸と金彩」では、うるし、染織、やきものなどの工芸にみられる金彩の多種多様な形態をご紹介します。穏やかな輝きの金泥、するどく光る平文、燦々とふりそそぐ砂子、光を織り込む金糸。金彩と素材との組み合わせや、作家のわざと表現をお楽しみください。

■観覧料

一般1,000円(800円)
大学生800円(600円) 高校生以下無料

※2階コレクション展観覧料を含む

※()内は65歳以上の方および20名以上の団体

※身体障がい者・精神障がい者保健福祉・療育手帳をお持ちの方、またはミライロIDをご提示の方および付き添いの方1名は観覧無料

■関連行事

記念講演会

「金色に輝く美の世界―金と金箔のおりなす魅力―」

4月23日(日) 13時30分～15時

講師・山崎達文氏(金沢学院大学名誉教授)

会場・美術館ホール(当日先着190名)

*聴講無料、申込不要

ギャラリートーク

4月30日(日)、5月4日(木・祝)、6日(土)、7日(日)

各日13時30分から

*要観覧料、申込不要

土曜講座

5月13日(土) 13時30分～15時「縁付金箔と工芸」

寺川和子(学芸第二課長)

5月20日(土) 13時30分～15時「金銀彩と九谷焼」

奈良竜一(学芸主任)

会場・美術館講義室

*聴講無料、申込不要

ワークショップ「ミニ屏風に絵を描こう!」

5月14日(日) ①10時～「親子で楽しむ回」

②14時～「オトナも楽しむ回」

会場・美術館講義室

*参加無料、要メール申込(詳しくは公式ウェブサイトにて)

イトにて)

※感染症の状況により内容を変更する場合がございます。最新情報は公式ウェブサイトをご覧ください。



《古赤絵金欄手仙菱瓶》景徳鎮窯



石川県指定文化財《虎図》岸駒



加賀文化の粹 I

3月28日(火)~4月17日(月) 会期中無休

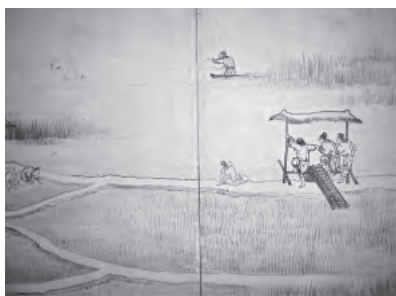
NHK BS8Kの番組「国宝へようこそスペシャル 東京国立博物館」で、前回紹介した当館の重文《四季耕作図》久隅守景作が参照されたことから、展示の予定を変更し、同じ守景による県文指定の《四季耕作図》と同時に展示します。

田園画家とも呼ばれるように、守景は四季の農耕をめぐる人々の営みを数多く描いています。屏風装によるものだけでも十数点は現存しているようですが、作風は、中国風俗から日本風俗へと大きく転換してゆきます。今回紹介する県文の《四季耕作図》は、山水の表現から、和様化を見据えた中国風俗による最終段階の作例と考えることができます。そして、本作にも守景の遊び心が随所に発揮されています。

まず、夏の景の竜骨車を詳しく観察してみましょう。竜骨車とは、中国の灌漑用揚水機で、室町時代以

降の中国風俗による耕作図によく描かれます。狩野派で学んだ守景ですから、竜骨車の用法については理解しているはずですが、どうも水を揚げる方向が逆に描かれているようです。さらに、車を回すためのペダルが描かれていないため、根本的に機能しません。

そこで守景の真意が気になるところですが、本作も加賀滞在中に発注されたと考えればこの点は理解できます。前回述べたように、守景には、加賀藩が取り組んだ農業政策の先進性を称賛する制作意図があったようです。したがって、加賀藩では灌漑用水が整備され、竜骨車はもはや無用だが、守景は自然と一体となって無心に遊ぶ人間の理想像として、あえて描いたということでしょうか。その他にも脱穀の場面など、考えさせる描写があります。



石川県指定文化財《四季耕作図》(部分)、久隅守景

絵画と調度

—重要文化財 伝雪舟筆《四季花鳥図》を中心に—

3月28日(火)~4月17日(月) 会期中無休

前田育徳会尊經閣文庫分館にて開催する特集展示「絵画と調度 重要文化財 伝雪舟筆《四季花鳥図》を中心に」では、加賀藩の御用を勤めた絵師六代梅田九栄による《鷹狩図絵巻》のうち、春の巻を紹介いたします。

鷹狩とは、文字どおり「鷹を飼って訓練し、鳥獣を捕獲すること」をいい、その歴史は古代にまでさかのぼります。『日本書紀』には、仁徳天皇が献上された鷹を百舌鳥野に放ち、雉を捕えたとあります。単なる娯楽ではなく、許可がないと行えない権力と家格の象徴だったのです。戦国時代以降は、鷹と捕らえられた獲物は贈答品としても重宝されました。

絵画の画題では、久隅守景の《鷹狩図屏風》がよく知られています。両隻に広がる山々と田畑で行われ

た鷹狩の様子を、狩野探幽門下のひとりであった守景が描いたことから、幕府に仕える絵師にとって、鷹狩が重要な画題のひとつであったことがうかがえます。この鷹狩図の模本が、加賀藩の絵師を勤めた梅田家に伝わるのです。

江戸後期に活躍した六代梅田九栄は、守景の《鷹狩図屏風》の影響を受けながら、この《鷹狩図絵巻》を制作しました。絵巻は、春夏秋冬の四巻からなり、春の巻では、梅や桜が咲く山道を、弓を持ち、犬を連れた従者や鷹匠を率いた行列が冒頭に描かれます。鷹が獲物を捕らえる光景だけでなく、捕獲した鳥類を運び、調理し、宴が催される様子からは、春らしい賑わいがうかがえます。



《鷹狩図絵巻》のうち春の巻(部分)、六代梅田九栄

特別陳列 利家を描く ―再考と顕彰―

4月23日(日)～5月28日(日) 会期中無休

学芸員の眼

もう二十年ほど前の話ですが、NHK大河ドラマ『利家とまつ』にあわせて本館で企画展を開催した際、石川富山両県に伝わる江戸時代に描かれた利家の肖像画を調査しました。二十本ほどあったでしょう。利家が江戸時代をとおして崇敬され続けていたことがわかり、興味深かったのですが、明治時代に模写した別の記録も多く確認でき、こうした背景については、江戸時代のそれとは別に考えなくてはならないと思いました。

同じような時期に、江戸幕府から続く修史事業を引き継いだ明治政府内においても、全国各地に伝わる大名などの肖像画の模写が行われています。それらは東京帝国大学へ引き継がれ、わが国の歴史学の成立に寄与しました。前田家も明治末より『加賀藩史料』の編纂に取り組むことを思うと、自らの「再考」こそが求められた時代だったとわかります。



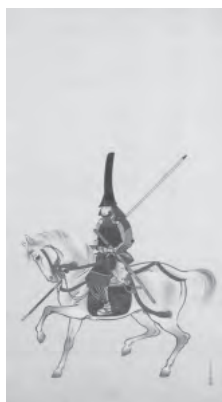
《高徳公赴末森城之救援図》 村田丹庵

加賀藩の基礎を築いた前田利家の肖像画は、前田家とゆかりのある寺院に多く伝来しています。各寺院が前田家とのゆかりを示す大切な根拠であったほか、利家の忌日には掲げて供養したのです。やがて明治時代になると、加賀藩の基礎を築いた前田利家の「再考」が始まり、これらの肖像画が調査、記録されました。今日の前田育徳会には、利家を「顕彰」すべく模写された肖像画や、歴史的業績を絵画化した記録が多く残されていることから、本特別陳列では、明治時代に描かれた利家の姿から、どのような利家像をこの時代に伝えようとしたのかを考えます。

例えば紹介するのは、織田信長が今川義元を破った桶狭間の合戦において、三つの首級を得、信長に献じたという活躍を描いた《桶狭間凱旋図》です。三点

展示します。こうした馬上の勇ましい姿を描いた利家像は、主に家臣の家に伝わり、その勇猛な姿を掲げ代々供養し続けていました。信長の臣下であった利家は、この時出仕の禁を破って戦いに出ており、頭は兜を外した布のみを巻いた姿で描かれています。しかし、三点のうち一点は、どうでしょう。ありえない立派な鯰尾の兜をかぶった姿で描かれているのです。このように、明治時代に描かれた利家の姿には、脚色されたものがあります。

しかし、それは「誤り」でも「偽り」でもありません。前田家の正統性を「強調」せねばならなかったのです。政治的権力を失った時代に、あえて求められた絵画といえます。



《利家公尊像》

近現代工芸(第5展示室)

四季の移ろい I

4月23日(日)~5月28日(日) 会期中無休

今年度コレクション展示では4期に渡り四季の移ろいⅠ~Ⅳと題して、共通としたタイトルから、さまざまな切り口でお届けします。スタートとなります今期では草花の彩りから四季の移ろいを満喫して頂きます。

毎回優品選ではその展示期間に合わせて春であったり秋冬であったり季節に合う作品をお楽しみ頂いておりますが、移ろいという括りでお楽しみ頂くにあたり、まずは親しみやすく春から冬へと流れる草花の移ろいを、工芸各分野の中でも染織・着物を多めにお届けします。

暖かい陽が差し込み、黄色から始まり薄いピンク、そして鮮やかな色彩へ。盛夏時の緑や赤から茶や白へと移り変わる草花。スタートの春の花として真っ

先に思い浮かべるのはなんとと言っても桜です。展示の頃にはもう花見の頃は過ぎてしまっているかと思いますが、染織・着物では、ぱっと目を引く色合いの上田外茂治作《友禅訪問着「蒼天の樹」》や落ち着いた夜色の中に咲く桜、白坂幸蔵作《友禅訪問着「夜桜」》を。そして夏に向けて続く紫陽花、羽田登喜男作《友禅白地紫陽花文訪問着「清裳」》と並びます。

今回の美術館だよりはひと会期先のコレクション紹介となります。春の花を紹介いたしましたでしたが、ほかの分野の作品の紹介はまた次回に。しばらくは公式ウェブサイトの所蔵品作品一覧にて上記の工芸作家たちの作品等をご覧いただき、会期が来るのをお待ちください。



上田外茂治《友禅訪問着「蒼天の樹」》

古美術(第2展示室)

加賀文化の粹Ⅱ

4月23日(日)~5月28日(日) 会期中無休

加賀文化の粹と題した本特集ですが、「粹」はどう読むのでしょうか。これを江戸ことばと解釈すれば「いき」となります。一方、京ことばと解釈すれば「すい」となります。先行する江戸や京都の文化を取り入れつつも、最終的には江戸でも京都でもない独自の価値を醸成してゆくとところに「加賀文化」の特質があるとすれば、時に活動的な側面もある「いき」よりは、内面的で深く考えさせる側面もある「すい」がふさわしいと思います。

江戸幕府の統治下に置かれた加賀藩にとって、文化を推進する原動力は幕府への対抗心でした。藩祖と二代藩主が千利休から直接茶の湯を学んだ加賀藩には、美をもって権力者に挑む思想が継承されてきました。その美は、外見上はもちろんですが、久隅

守景の作品に見られるような、考えて見出される美に主眼が置かれていました。世阿弥が『風姿花伝』で、「花と、面白さと、珍しさと、これ三つは同じ心なり」と述べていることが思い起こされます。

こうした「すい」を支えているのが、飽くことのない技術の追求です。今回は、加賀蒔絵、加賀象嵌鏡、大樋焼、加賀友禅の名品も展示します。加賀蒔絵については、今年度「琳派と五十嵐派」の特集を予定していることから、今回は伝清水九兵衛の重文《蒔絵和歌の浦図見台》と県文《蒔絵亀図鞍・鏡》を展示します。いずれも九兵衛の代表作として知られた作品ですが、精緻な技巧と絵画的表現力が作者の厳しい研鑽を物語っています。



重文《蒔絵和歌の浦図見台》伝清水九兵衛(部分)

第3～9展示室

第79回現代美術展

—日本画・工芸・書—

3月31日(金)～4月17日(月) 会期中無休

近現代絵画・彫刻(第3・4・6展示室)

優品選

4月23日(日)～5月28日(日) 会期中無休

日本画分野は企画展「陰翳のなかの金彩」にちなみ、金を使用した作品も展示します。金屏風の余白を朝日に見立てた横山大観の構想画《長江の朝》は、大観の大胆な絵画世界をよく表す大作です。また、同じ金を使った屏風でも橋本関雪《拾牛図》は、絹地の裏に金箔を貼る裏箔の技法を用いています。金の表情が直接表れない、落ち着いた表現です。

油彩画からは藤森兼明《アドレーション・ミトロポリス》を紹介합니다。藤森は美大卒業後に渡米し、滞在中の二十代にカトリック教会で洗礼を受けます。四十歳を目前に制作活動を再開、以来、信仰を色濃く映す作画で知られます。実在するギリシヤの聖堂に取材した本作は、聖堂内の陰翳に揺らめく金彩と、白い衣装に自身の信仰への崇敬の念が表れています。春になり、動物たちも目を覚まし始めます。素描・

版画作品からは、脇田和の生涯のテーマ、鳥の作品を紹介합니다。脇田は多くの鳥をモチーフとした作品を手がけていますが、それらは洗練された画面構成と色の響き合いの中で、素晴らしい感性を与えられた作品群です。鳥と向き合う脇田は、常に新鮮な気持ちと温かい眼差しで接しており、それだからこそ生まれる世界が表現されています。

彫刻分野からは、吉田三郎の動物彫刻を紹介します。吉田が彫刻を学んだ明治後期以降においては、モデルの確保が難しいときに動物を題材にすることが多かったといえます。また、子煩悩だった吉田は動物が好きで、よく家族と動物園を訪れていました。動物彫刻は、吉田が活躍した時代や家族との思い出を反映したものであるといえそうです。今回は、戦後の動物彫刻から数点を展示いたします。

昭和二十年十月に第一回展が開催された現代美術展は、本年七十九回展を迎えます。その間、文化勲章受章者、日本芸術院会員、人間国宝をはじめ、多くの実力作家を生み出し、その成果は「美術王国石川」として大きく花開いております。

本展では、所属会派を超えて、日本画・洋画・彫刻・工芸・書・写真の六部門から、石川県美術文化協会員の秀作と、一般公募からの入賞・入選者の意欲作を一堂に展示します。

会期中、各部門で列品解説を行います。

◆部門(当館展示)

日本画(第3・4展示室)

工芸(第5・6展示室)

書(第7・8・9展示室)

※金沢21世紀美術館では、洋画・彫刻・写真が展示されます。

◆連絡先

一般財団法人石川県美術文化協会

電話・076-260-3581

◆観覧料(金沢21世紀美術館と共通)

	一般	大高生	中小生
当日	1,000円	700円	600円
前売り	900円	600円	500円

団体(20人以上)は前売り料金の各100円引き。

※当館友の会会員は会員証の提示で団体料金



吉田三郎《緑蔭》

〔参加者募集〕

令和5年度 友の会第21回バスツアー

所蔵作家の工房と金彩をめぐる

開催日：令和5年5月27日（土）

集合時間：午前8時50分

発着：石川県立美術館

※前回と集合場所が異なります。

ご注意ください。

参加代金：友の会会員 12,000円

会員以外 13,000円

募集定員：15名 ※応募者多数の場合は抽選になります。

◆見学地

企画展「陰翳のなかの金彩」にあわせ、出品作家の工房と金彩に関連した施設を巡ります。

【錦山窯／ギャラリー嘸旦】

人間国宝・吉田美統氏の工房兼ギャラリーです。「釉裏金彩」に関するご説明をいただきつつ、その魅力を堪能しましょう。

【福島武山工房】

赤絵細描の作品を精力的に発表し続ける福島武山氏。実際に制作も行っている工房をご解説と共に見学します。

【金沢市立安江金箔工芸館】

金箔に関する博物館です。金箔の性質や製造工程のご説明をいただいた後、春の企画展を鑑賞します。

【石川県立美術館】

企画展「陰翳のなかの金彩」を担当学芸員の解説付きで見学します。展覧会の見どころや裏話などをご紹介します。

◆申込方法

以下の内容を記載の上、往復はがきもしくはメールにてご応募ください。

※1通のはがき・メールで2名以上の申込をされる場合は、下記内容を人数分ご記載ください。

①往復はがきの場合

往復はがき裏面…「美術館バスツアー希望」と明記の上、氏名・年齢・性別・郵便番号・住所・電話番号・会員番号(ある方のみ)をご記入ください。

返信はがき表面…返信先(ご自身の住所)をご記入ください。

※消えるボールペンは使用しないでください。返信はがきの裏面には何も記入しないでください。

②メールの場合

件名…美術館バスツアー希望

本文…氏名・年齢・性別・郵便番号・住所・電話番号・会員番号(ある方のみ)

◆応募先

〒920-0963 金沢市出羽町2-1

石川県立美術館バスツアー係

ishibi@pref.ishikawa.lg.jp

◆応募締切

令和5年4月14日(金)当館必着

※ご自身の体調を考慮の上、お申込みおよびご参加いただきますようお願い申し上げます。(当日、医療従事者は同行しません)。

4月の行事予定

■企画展 「陰翳のなかの金彩」関連行事 講演会
13時半～15時 美術館ホール *聴講無料 申込不要
23日(日)
演題： ^{こんじき} 「金色に輝く美の世界—金と金箔のおりなす魅力」 講師：山崎達文氏(金沢学院大学名誉教授<工芸史>)

《飴釉獅子香炉》あめぐすりししこうろ

幅16.0 奥行9.5 高11.1cm
江戸17世紀

初代大樋長左衛門 しょだいおおひちようざえもん

寛永8年(1631)～正徳2年(1712)



千利休没後の茶の湯は、古田織部、小堀遠州、金森宗和らによって進められた大名茶が主流となりました。その一方で、利休の孫・宗旦は千家の再興とともに利休の侘び茶への回帰を強く打ち出しました。前田家としても、藩祖・利家、二代・利長が共に利休の弟子であり、また利休の高弟、高山右近も藩臣として二十六年間を金沢で過ごしていることから、利休の茶の湯への思いは格別のものでありました。三代・利常は遠州、宗和とともに宗旦とも親交があり、宗旦の四男・仙叟宗室が晩年の利常に仕えた背景には、宗旦の意向があったと推測されます。

利常が一六五八年に没した後も仙叟宗室と加賀藩の関係は続き、綱紀には一六六一年に初御見得して以後、三十年以上にわたって仕えました。金沢において宗室は、大名茶にもなって興隆した「きれいさび」の美意識を見事に利休、宗旦の流れを汲む侘びに転換しています。大樋長左衛門の作陶は、その大きな成果でした。

唐物の獅子香炉は茶の湯で珍重され、樂焼の獅子像で知られる樂家も意欲的に取り組みました。この香炉は、その流れを受けて制作されたもので、顔を天に向け、口を大きく開けた臥せ獅子の形態です。胎土は細かく、釉は全体に飴釉が厚くかけられ、全体的にやや黒味を帯びており、身の内部は露胎となっています。初代大樋長左衛門の彫塑的な技量が遺憾なく発揮されています。

次回の展覧会

令和5年6月3日(土)
～25日(日)
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館		第2展示室
	武の装い I	仏教美術
第5展示室	第3展示室	第4・6展示室
四季の移ろい II 【工芸】	アンフォルメル時代 【油彩画・版画】	優品選 【近現代絵画・彫刻】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
4月3日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

4月の休館日は
18日(火)～22日(土)

『石川県立美術館だより』に広告を掲載しませんか？

石川県立美術館友の会会員・石川県立美術館協力者・
県内各行政機関及び文化施設・全国の美術館・博物館へ 郵送配布!

2,500部発行

WEBお問合せ
フォームはコチラ

詳しくはお問い合わせください

株式会社ウィット Tel.072-668-3275

株式会社ウィット 検索

〒569-0071 大阪府高槻市城北町1丁目14-17-501

Fax.072-668-3276

HP.https://wi-t.co.jp/

石川県立美術館だより
第474号(毎月発行)
2023年4月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/石川県立美術館は電源立地地域対策
交付金を活用して運営しています。